

ガーデニングと木質材料

齋藤直人

「ガーデニング」。庭いじり、土いじりと呼ばれていた頃から見ると大きく様変わりし、どちらのお庭でも四季折々、ハーブやカラフルな花々が所狭しと咲き誇っています。単純に「自然、手作り」からだけではなく、香り、色合い、四季の変化なども計算されて植えられているようです。

ガーデニングを行っている人々の目的は「家から見て楽しめる、生活に潤いを感じる、収穫の喜びや料理の楽しみがある、道行く人の目も楽しませることが出来る」などが挙げられています（平成11年度、林産試験場調査より）。「果実や野菜を収穫するため」のような現実的な目的に止まることなく、ガーデニングは住まい、街並みを豊かに演出したり、人々にゆとりや憩いを与えているようです。

その脇役であるガーデニンググッズにも大きな変化が見られます。鉢などでも、以前のような素焼きやプラスチック製の粗悪なものから、デザイン性の高い陶器や金属製が見られるようになりました。移植ゴテ、ハサミ、グローブ、ネームプレートや支柱なども、おしゃれなものが現われています。ホームセンターでは、これらのグッズが一大スペースを占領するまでになっています。もはや、手軽な趣味とは言えない気配もありますが、このガーデニングブームを支えるもう一つのコンセプトに、「環境に優しい」があるようです。農薬の使用を控えたり、廃棄処分の困らない資材を使用したりして、花、虫、人々の地球規模での共生が目指されているようです。

木製ガーデニング用品には、木レンガ、ウッドデッキ、ラチスフェンス、花台をはじめ、ウイスキーなどの古い酒樽がコンテナ、テーブル、椅子などのインテリアとして、鉄道の枕木がエクステリアとしてなど、思わぬ使い方も見られるようになりました。

木材は土壌中の微生物によって腐り、他の植物の肥料となったり、最終的に水と二酸化炭素となって循環することが大きな特長です。この生分解性から環境に優しい資材とされています。しかし、環境に優しいことは、割れや腐れなど耐久性が問題となることも意味します。割れや腐れなどの欠点は、ブームだからといって許されるものではなく、木製用品はその維持管理方法が十分理解された上で使用されることが望まれます。また、木製用品では、実際に屋外に施工することで明らかとなる問題点も多いようです。速やかに問題点を整理、把握し、改善・改良を進め、より質の良いものを提供することが必要です。

林産試験場でも、様々な木製ガーデニング用品の開発に取り組んでいます。そこで、今回はガーデニングにも適用可能な木質系緑化資材の特集としました。生分解性を利用した木材繊維の育苗ポット、炭化物を用いた土壌被覆材および土壌改良材、木タールを用いた土壌被覆材の実証試験をご紹介しますとともに、木材防腐に関する屋外試験の様子を取りまとめました。

ガーデニング用品といっても、目的に応じて求められる耐久性、施工性などは様々です。しかし、実用化に向けた課題は共通するところが多いようです。旭川などではガーデニングを行っている人々が全体の60%にも達しており、関連グッズも含めたガーデニング市場はかなりなものと考えられます。ますますギャラリー化しつつある庭に、新たな木製ガーデニング用品やより良い緑化資材の提供を図るため、本特集がご活用いただければ幸いです。

(林産試験場 成分利用科)